
二人だけの秘密

高浜ゆりえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人だけの秘密

【Zコード】

Z6945B

【作者名】

高浜ゆりえ

【あらすじ】

俺は土田舎の高校へ通う、ぐぐく普通の男子高校生。別にこれといつて特技もないし、将来も普通に暮らせたらなと思っている普通の男だと自分では思っている。

(前書き)

運命的な出会い?
それとも…

その少女と運命的な出会いを果たしたのは、夏休みを終えた9月の第一週のことであった

「ふう… ダルい」

中学校の校門を通り、校舎の玄関の前まできた俺は、滲む汗を学ランから取り出したハンドタオルで拭いた。
ほんのり、博多風味の塩味だ んなわけないか。

「あれ？ なんで人がいないんだ？」

ハンドタオルをバッグに入れた俺は周囲に入っ子一人いないことに気づいた。

よく平日に乱入してきては学生達の集中力を乱して帰っていく犬のコロ（仮名）の姿もない。

「……」

しかし… 犬はいいとして、先生までいないとはどういうア見だ、職務怠慢か？ それとも大規模なストライキでも起きたのだろうか？

「まさか… 暑さで溶けちまつたんじゃないよなあ……」

早く日陰に入りたい、溶けゆくハーゲンダッツアイスの気分で俺はため息を漏らしながら校舎の中に入ろうとした… その時であった

「あーっ！遅刻しちゃつよおおおおッ！」

蝉の鳴き声に混じって、まるで体育教師のホイッスルのよじこいやに元気な悲鳴が校門辺りから響いた。

遅刻だと？馬鹿な まだそんな時間では

いきなりどけるか、俺は悪いが体育の成績は小学校の頃から【ふつう】だ、因みに帰宅部、反射神経は自慢じやないが悪い方だ。そんな反射神経を使って振り向こうとした俺の背中に、何かが衝突する。

「なああっ？！」

背中にタックルを喰らい、俺は前のめりに吹き飛び頭を地面にぶつけ そうになつたが、両腕でなんとか受け身をとることができた。

よべやつた、自分。

「 なつ！－！なにしやがる馬鹿ッ！－！」

腕立て伏せの体勢から立ち上がり、俺にタックルをかました馬鹿の元へと振り向く。

そこにいた馬鹿は、ショートヘアの髪をむち、猫のよつよつちとした瞳をもつた 女の馬鹿であった

「馬鹿じやなこよ……後ろに田代つこてないの?」

ついてるわけないだろ?、ビルの「ータイプ」あるまこし。
ブレークの壊れた自転車は自転車屋へ、いきなり止まれない貴様は
家へ帰れ。

…とこりうか、こりうは誰だ?

「つりか… お前誰だよ?」の学校の制服じゃないだろそれ?

そいつが着ていたのは、今時珍しいセーラー服であった。
転校生なのだろうか?

「え? 私? 私は今日からこの学校に通つぱっチピチの女子高生だよ
へえ、周囲を小さな民家と森に囲まれたこの土田舎の高校に、わざ
わざ転校生が来たのか。
といつかピッチピチって久しぶりに聞いたな: 都会では流行つて
いるのか?

そんなことより背中が痛い、どんだけ勢いつけて突撃しやがったん
だこりうは…

「…ああ… いて」

利き腕である右腕で背中をわざるが、それでも痛い。

「 痛かった… ?」

その転校生は流石に不安げな表情で背中を覗き込もうとしたが、俺は後ろに三歩下がつて眉を寄せて頷いた。

「ああ、痛かった、イタリアから牛が転校してきたのかと思った」

転校生は流石に申し訳なさげな表情で頭を下げた。

「ごめんね……でも牛じゃないよ、女子高生だよ」

そんなことは分かっている、転校生だからといって女子高生が牛に見える奴がいるとしたら、精神を相当病んでいるか、〇〇な薬を〇〇している人だろう。

「どうかお前……遅刻とか言つてたが……まだ時間はあるはずだぞ？」

俺は学ランを捲り、再び時計を見ようとした、まだ8時20分くらいだろう、余裕をもつて登校したからな

「あれ？ 8時50分だ」

嘘だ、もう門が閉まつてもいい時間だ。
しかし周囲にはこいつと俺以外人っ子一人いないんだが……どういうことだ学校！！

「あれ……？ そりいえば誰もいないよね？ 時間なのに……この学校つて通信制？」

そんな馬鹿な、俺は友達に連絡をとろうと携帯をポケットから取り出し、画面を見た。

「あれ……？ 8月31日だ」

俺は口を半開きにして、瞳を細めた。

「あれ？ 8月って30日までじゃなかつたっけ？」

俺の疑問を転校生が代弁する。

転校生は自分の携帯を取り出して、念入りに日にちを確認していた。

嗚呼、そういうば31日あつたんだっけか。

「…… なあ」

俺はうなだれながら、誰もいない学校の玄関の前で転校生を見つめた。

「…… ねえ」

転校生も疲れたような表情で苦笑いをしながら、俺を見つめた。次の言葉は、二人同時に出てきた。

「これは一人だけの秘密な」
「これは一人だけの秘密ね」

8月31日、こうして俺はどこから来たのか知らない転校生と、いきなりではあるが一人だけの秘密ができてしまった。

もうこれ以上の秘密を共有しないことを願いながら、俺は転校生に別れの挨拶をして、暑い通学路を戻っていくのであった。.

終わり

(後書き)

この作品の「意見」、「感想」をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6945b/>

二人だけの秘密

2010年10月11日02時41分発行